



## シャインマスカット

しゃいんますかっと

【サイズ】 ペンダントトップ  
約60mm×40mm

【素材】 ヒデナイト、プラチナ

### 【シャインマスカット】

藤巻 辰也

磨き上げられた宝石(ルース)を渡され、ブドウの形のペンダントトップを作ってほしいという依頼から生まれた作品。希少価値の高いヒデナイトを扱う緊張感と依頼主の思いを形にする使命感が、藤巻の職人意識を強く刺激した。ブドウらしさを表現するために、石をただ上からつるすのではなく、金属のフレームを複雑に配することで、より立体的にふんわりとした形を追求した。また、形の違う石1つ1つをどこにどの向きで配置するか、納得が行くまで「つけては外し」を繰り返した。依頼主が作品を見た瞬間に「イメージどおり!」と言っていたと営業担当から聞かされた時、藤巻は心の中でこっそりガッツポーズをしていたに違いない。



ペンダントトップ(裏)



微細金属工芸士

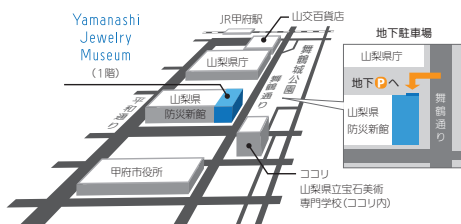
# 藤巻 辰也

## Vol. 15

2018年9月発行

craftsman jewelry file.15  
tatsuya fujimaki  
2018 September

craftsman jewelry



### 山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階  
<http://www.pref.yamanashi.jp/yjm/>

開館時間：10:00~17:30(最終入館17:00)

休館日：火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始、  
その他、臨時に開館・休館することがあります。

入館料：無料

駐車場：92台 山梨県防災新館地下有料駐車場(来館者は1時間無料)

山梨ジュエリーミュージアム発行



“もの作り”に魅了され、  
楽しさと難しさを知る

今からちょうど30年前、15歳だった藤巻辰也は、中学卒業後近所の人の紹介で株式会社シンクに就職した。

学校の技術家庭科が好きだった少年に、この仕事のイロハを教えたのは、圧倒的な知識ともの作りへの強いこだわりを持つシンクの代表小林と、その元でたたき上げられた現場の親方だった。プラチナとシルバーの違いも知らなかった藤巻にとって、知識も技術も全てを一から学ばねばならなかったが、すぐにその魅力に引き込まれた。学校の勉強は嫌いだった藤巻が、初めて自ら学びたいと思った。

金属の性質、道具の使い方や作業するときの姿勢。小林の、そして親方の教えを“基本”とし、最初の10年間は身につくまで“基本”を繰り返した。もの作りの楽しさは、もの作りの難しさの裏にある。事実、昨日まではできなかったことが今日できるようになる、それが何より楽しかった。

未来の持ち主を想いながらの制作  
だからこそ手間を惜しまない

日々の仕事は、デザイナーが制作するデザイン画を元に原型を作ることから、顧客のオーダーに基づく一点物の制作まで、さらには製品で使用する金具の改良など多岐に渡る。また、武田信玄が幼少期に使用していたウサギの文鎮を再現する県の依頼を引き受けたこともある。

もの作りで一貫して大切にしていることは、未来の持ち主のこと。ジュエリーはジュエリーボックスに仕舞って楽しむものではなく、身につけて愉しむものだ。デザイン性や製品の壊れにくさだけでなく、金属のディテールから宝石の見栄え、全体の重さなど、着けたときに不快に感じることなく何度も使いたくなるようなジュエリーになるよう、細部にまで気を配る。

「時には自分のデザインと全く違うものになる」そう笑って話す同僚のデザイナー吉井からは、デザインに込めた自らの思いに藤巻のこだわりが加わって生まれる作品への絶対の自信と、「そうだっけ？」ととぼける藤巻への絶大な信頼がうかがえた。

職人として本物の“基本”を追い求め、  
新たな挑戦へ立ち向かい続ける。

One for all, All for one  
日々新しい挑戦へ

藤巻のもの作りには、1人の強さがあり、1人ではない強さがある。

「作品を作っていて満足したことは、一度もない。何とか完成し、それが他人から評価されたとしても、自分自身は完璧だとは思わない」だからこそ、次の作品を作ろうという意欲は持続し、新たな挑戦に立ち向かい続ける。そう語る時の藤巻の目は、少年のように輝いている。

また、企画・デザインから製作まで自社ですべてを行う会社に所属し、そこで働く藤巻には、身近に沢山の仲間がいる。それは親方、先輩後輩など同じ分野に関わる人間だけでなく、デザイナーから営業担当まで、ジュエリーの全ての生産過程のスペシャリストたちだ。そうした環境の中、デザインの考案段階から製作側の藤巻が関わるなど、異なる分野の者たちが、お互いの意見を出し合いながら、より良い作品を共に作り上げることが実現されている。

新たな人材を育て、  
更なる“もの作り”の探求へと突き進む

時を経て、会社に自分より若い人材が増え、いつしか藤巻が親方の立場になった。彼らに教えるのは仕事ではなく“もの作り”だ。どんなにハイテク化が進んでも、その根底には昔ながらのやり方、職人の技がある。もの作りの“基本”を身につけてこそその応用であり、機械化、ハイテク化なのである。かつての自分がそうであったように、「まずは“基本”を身につけ、自分の手で作品を作り上げる楽しさを知ってもらいたい」と強く思っている。親方の教えが今の自分へと導いてきたと思うからこそ、自分が及ぼす影響を自覚し、指導にも熱が入る。

「経験を積みれば積むほど、自分にできないことがまだまだあることが見えてきた。どこまでも続く道だからこそ、もの作りはやめられない」

『工場長』や『製造部長』といった組織内での役職で自らの肩書を表すことを好まず、『微細金属工芸士』と言われることに満足げにほほ笑む藤巻は、職人そのものなのだ。

ej

craftsman jewelry

Vol. 15



藤巻 辰也(ふじまき たつや)  
微細金属工芸士

株式会社シンク  
甲斐市玉川1405-1  
Tel:055-276-7007